

令和元年6月20日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04807

研究課題名(和文) 吃音が改善した成人の語りから改善・悪化要因を検証および早期改善プログラムの開発

研究課題名(英文) The Validation of Improvement and Deterioration Factors of Stuttering and the Development of Early Improvement Program with Reference to the Stories of Adults in Whom Stuttering Improved

研究代表者

池田 泰子 (Ikeda, Yasuko)

岩手大学・教育学部・准教授

研究者番号：90387514

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：訓練によって吃音が改善した成人2名の訓練中のコメントやインタビュー調査を踏まえ、吃音の悪化要因と改善要因を検証し、その成果としてリーフレット「吃音の早期改善を促す幼児期の対応の引き出しを増やそう!!!」を作成した。リーフレットは、「不安と吃音との関係」「感情や意思の表出と吃音との関係」「幼児期の体験と吃音との関係」「話し方の工夫と吃音の関係」の4つの視点でまとめ、吃音の早期改善には、子どもに関わる大人のコミュニケーション量と質が影響していることが示された。また、調査結果を基に、吃音の状態が包括的に把握できるチェックシートの項目を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

吃音が改善した成人の方の声を参考に、吃音のある幼児への具体的な対応方法を提案したことは、早期改善が期待できる貴重な知見である。

また、吃音の悪化、改善には様々な要因が影響していることが明らかとなった。吃音が改善した、悪化したと判断するためには、多角的な視点で評価する必要があるため、まずは成人用の「吃音の状態チェック表(38項目)」を作成し、吃音者と非吃音者を対象に調査を実施し、項目検討を行った。

研究成果の概要(英文)：We validated factors which improve stuttering and those which deteriorate it by referring to comments from two adults who improved their stuttering through training as well as the results of a survey on them. Based on findings from this study, we created a leaflet entitled, "You Can Do It! Various Childhood Measures for the Early Improvement of Stuttering". The leaflet focuses on the following 4 perspectives: the relationship between anxiety and stuttering, the relationship between the expression of emotion and intention and stuttering, the relationship between childhood experience and stuttering, and the relationship between speech improvement and stuttering. It suggests that the quantity and quality of communication with adults has an impact on the early improvement of stuttering in children. Additionally, based on study results, we examined the items of a check sheet which is designed to help the comprehensive understanding of the state of stuttering.

研究分野：言語聴覚療法

キーワード：吃音 早期改善 改善・悪化要因 間接法 成人吃音者

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

吃音は原因不明の障害であり、吃音に携わる臨床家はそれぞれの仮説を立て、訓練を行っているため、多くの訓練法が存在する。現在、吃音の訓練法には大きく分けて2つの流れがあり、1つは「リズムをとる」「ゆっくり話す」などの話し方の工夫を促す直接法、もう1つは、話し方の工夫を促さない間接法である。幼児期は間接法、児童期以降は直接法で訓練している臨床家が多いなか、筆者は幼児から成人まで一貫して「間接法」を実践している。筆者が用いている成人の吃音者を対象とした訓練法は、幼児期から現在に至るまでのコミュニケーションの質と量、場面の恐れやその時の吃音症状の有無などが設定されている吃音質問紙・問診・観察情報などから得られた情報を基に、吃音の悪化に結びついていると考えられる要因を分析する。その要因に対して幼児から現在の年齢に向かって年表方式のメンタルリハーサル法で対応し、吃音進展段階第4層から自然で無意識な発話(正常域)を目指す方法である。訓練を行ったことで吃音進展段階第4層から正常域への移行期に改善した成人の吃音者の訓練中の語りから、幼少期の悪化要因と思われることに対応することで、現在の吃音症状が軽減したことを報告した(2013,2014)。報告数の少ない間接法で吃音が改善した成人吃音者の体験や語りなどの中に、吃音の早期改善につながる知見が含まれていると考え、本研究を立案した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、訓練によって吃音が改善した成人の語りなどの情報から得られた情報を分析し、吃音の発生予防、幼児・児童の吃音を悪化させない対応方法、幼児から成人の吃音児者の吃音が早期に改善する方法など、吃音の改善要因の解明を試み、吃音で苦しむ人が軽減することを目指すことである。

3. 研究の方法

第一研究 改善した成人者2名から得られた情報を踏まえて改善要因・悪化要因を検証し、リーフレットとしてまとめる

(1) 訓練中の語り

訓練記録、録画していた訓練場面における吃音のある成人の語りを収集する。

(2) インタビュー調査

筆者が個別に半構造化面接を行った。質問内容は、「改善要因」「悪化要因」「吃音のある子どもの保護者に伝えたいこと」などである。

(3) RASS 吃音質問紙から得られた情報

訓練において、RASS 吃音質問紙に掲載されている「ファーストフードで注文する」など生活場面441場面の中で、実際に経験した場面について「恐れ(7段階)」と「発話症状(7段階)」を定期的に判定してもらう。その結果と吃音進展段階の経過を整理する。

第二研究 成人用「吃音の改善状況把握シート」の検討

第一研究の調査結果より、吃音症状の出る場面や治り方は個人によって異なり、吃音の悪化、改善には様々な要因が影響していることが明らかとなった。吃音が改善した、悪化したと判断するためには、多角的な視点で評価する必要があるため、第一研究の調査結果より吃音の改善や悪化に関係があると考えられる要因を項目として挙げ、吃音者而非吃音者を対象に予備調査を実施し、項目を検討する。

4. 研究成果

(1) 第一研究

初回時の吃音進展段階が第4層の成人Bの検査場面における吃音症状と生活場面の吃音症状を比較したところ、初回検査場面の「吃音中核症状頻度」は3.96%(ごく軽度)、「総非流暢性頻度」は8.91%(正常範囲)であったが、実際に生活の中で体験した194場面中、「場面の恐れがなかった」と回答した場面は約3%、その場面において、「発話症状がなかった」と回答した割合は0.5%のみで、検査場面と生活における吃音症状の重症度は異なっていた。このことから、吃音の方の苦しみを把握するためには、検査場面の症状だけではなく、生活場面における症状を客観的に、包括的に把握することが適した訓練プログラムの立案につながる事が考えられた。

初回時の吃音進展段階が第4層の成人Aの訓練記録を整理した。今回使用した訓練法は、現年齢からではなく、幼児期の悪化要因から対応するため、Aの場合も3歳の場面

から開始した。1年1ヶ月後に吃音進展段階が4層から3層に改善したが、その時までに対応していた年齢は、幼児期から小学校低学年の内容であった。生活で経験した場面160場面中、「発話症状がない」判定した場面は、初回面談時が3場面、訓練開始1歳1ヶ月後は、37場面と約10倍に増えており、日常生活場面においても改善がみられていた。幼児期の対応内容は、肉親に甘える、思う存分話したいことを話すなどの大人とのコミュニケーションの質や量に対応するものが多かった。このことから、幼児期の悪化要因に対応することは、日常生活における場面の恐れと発話症状の軽減に関連があることが示された。

過去に話し方の工夫を行っていた吃音者Aは、自然で無意識な発話とは、「頭の中で考えて言葉を同時に出している」という感覚であった。また、このことばは言えるかなと考えた時点でどもることが多く、胸が重いという感覚があったと語った。訓練を通して頭の中で自然で無意識な発話練習を多く行ったこと、日常生活場面においても話し方の工夫を止め、自然で無意識な発話を実践したことが、吃音改善要因の1つと考えられた。

上記～など、吃音が改善した成人2名から得られた情報を踏まえて改善要因・悪化要因を検証し、「吃音の早期改善を促す幼児期の対応の引き出しを増やそう」というタイトルのリーフレット(12ページ)を作成した(図1)

リーフレットの目次は、「改善した方の声」「子どもが受け止められていると感じる場面(体験談)」「吃音について」「実施した訓練法について」「まとめ」である。

改善した方の声では、「不安と吃音との関係」「感情や意思の表出と吃音との関係」「幼児期の体験と吃音との関係」「話し方の工夫と吃音の関係」の4つの視点でまとめた。各ページは、「改善した方の声」「改善のポイント」「解説」で構成されている。

「不安と吃音との関係」では(図2)『自分は愛されていないかと思ったけど、良いイメージの場面をたくさん思い浮かべたら、やっぱり大事にされていたことを思い出した。悪い方向に考える癖があったけど、訓練を重ねたことで少しずつポジティブに変換する力がついてきた。』という語りを基に、子どもが不安に感じてしまう要因について解説した。



図1 作成したリーフレットの表紙

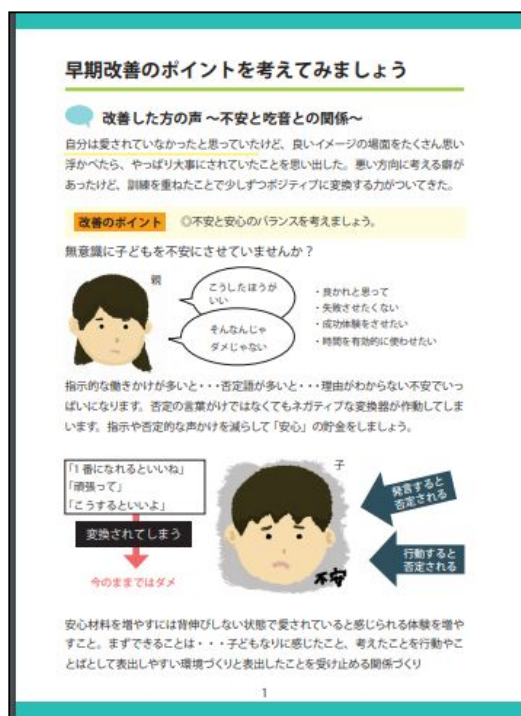


図2 吃音者の声のページ

「感情や意思の表出と吃音との関係」では(図3)『完璧・優秀な子だったら、もっと愛されるし、褒められるので、良い子でいたかった。良い子でいるために自分の感情と意思を抑えつけた。過去に不満を言いたかった場面を思い浮かべて言いたいことを言って、さっぱりすっきりした。この訓練を受けてから生活のなかでも感情や意思を表出できるようになった。それは自分の感情を認めていることであり、自分を大事にしている、自分を肯定していることだと思う。』という語りを基に、子どもが言いたいことを言える環境を整え、自分を肯定できる場面を増やすことを提案した。

改善した方の声～感情や意思の表出と吃音との関係～

完璧・優秀な子だったら、もっと愛されるし、褒められるので、良い子でいたかった。良い子でいるために自分の感情や意思を抑えつけた。過去に不満を言いたかった場面を思い浮かべて言いたいことを言って、さっぱりすっきりした。この訓練を受けてから生活のなかでも感情や意思を表出できるようになった。それは自分の感情を認めていることであり、自分を大事にしている、自分を肯定していることだと思う。

改善のポイント ◎言いたいことを言える環境を整え、自分を肯定できる場面を増やしましょう。

<言いたいことを言えない場面>
 他者の顔色を気にして言えない場合
 吃音症状が気になって言えない場合

こんなことを言ったら嫌われる
 吃音症状が出たらバカにされる

こんなことを言ったら嫌な顔される
 吃音症状が出たら恥ずかしい

<言いたいことを言えないと・・・>
 算数の授業で先生にあてられた場面
 食べたいものを奪われた場面

黙ってる
 (わからないことになる)

作りのよいものでいいよ

2

図3 吃音者の声のページ

改善した方の声～幼児期の体験と吃音との関係～

吃音の改善要因は、現在にはない、今の症状は表面。本当の原因は過去の深いところにある。

頭のなかに色んな失敗談とか、色んな嫌な記憶とかが、トラウマとか、不安とか、全部、全部ため込んでいる状態なわけじゃないですか。結局そういう不安な気持ちがあるのが吃音の症状に作用しますよね。

改善のポイント ◎嫌な記憶が深く刻み込まれないように、多く積み重ねられないようにストレス対応力の基礎となる「安全基地」に栄養剤（ガソリン）を注ぎ、安定させましょう。ガス欠では車は前に進めません。

日常生活には「心配なこと」「ドキドキすること」「うまくいかないこと」などストレスを感じる場面があり、年齢を重ねると多くなります。ストレスに対応する力は安全基地の存在が重要です。

図4は「安全基地」の概念を示しています。中心には「安全基地」とあり、その周囲には「自分でいいところを伸ばしてくれ」と感じられた体験、自分だけの力で乗り越えられた体験、味方だと感じられた体験、変えられていると実感できた体験、気軽に感情や意思を表出できた体験が示されています。また、「初めて食べた人に話しかけてみようかな」「うましくないけど挑戦してみようかな」といった挑戦の意欲も示されています。

ストレス対応力が高い子ども

- ・ストレスから回復できる・ストレスをスルーできる
- ・挑戦→成功体験によりさらにパワーチャージ
- ・ストレスを跳ね返す力を持っている

ストレス対応力が弱い子ども

- ・ストレス回復に時間がかかる
- ・少しのストレスで落ち込んでしまう
- ・自信をつける体験にチャレンジできない
- ・ストレスを恐れて行動範囲が狭くなる

3

図4 吃音者の声のページ

「幼児期の体験と吃音との関係」では(図4)『吃音の改善要因は、現在にはない、今の症状は表面。本当の原因は過去の深いところにある。頭のなかに色んな失敗談とか、色んな嫌な記憶とか、トラウマとか、不安とか、全部、全部ため込んでいる状態なわけじゃないですか。結局そういう不安な気持ちが吃音の症状に作用しますよね』という語りを基に、嫌な記憶が深く刻み込まれないように、辛い体験が多く積み重ねられないようにストレス対応力の基礎となる「安全基地」に栄養剤（ガソリン）を注ぎ、安定させることを提案した。

「話し方の工夫と吃音の関係」では(図5)『以前は、人と話すとき、吃音症状が出ないように話し方の工夫をしていました。話し方の工夫を全て試してダメだったら、本当に辛かった。いつ症状が出るか、コミュニケーション場面はいつも緊張と不安がいっぱいだった』『話し方の工夫は10回くらい試して、1回2回くらいよく喋れたけど、その後は全然効かない。使えば使うほど悪化するから、自分に対して失望した』『話し方の工夫をしていた時は、自分のなかにロボットと操作している人がいた。事前に「深呼吸してから話そう」「口を大きく開けて話そう」等と準備してからスイッチを感じた。常に自分の頭で自分をコントロールしていた。今は一体感があって、会話を楽しんでいます』『例えば、冷蔵庫と言えないから、「この」とか「あの」とかつけて工夫します。今度「あの」とかまで意識して言えなくなってきちゃって、どんどん自分で選択肢をつぶすようなもの。たぶん意識が冷蔵庫から「この」に向かうから冷蔵庫のことをどうでもよくなっているから流暢に言える。次は「この」を意識するために、使えない武器になる。工夫すればするほど苦しくなっていく。ずっと使える話し方の工夫があれば、誰も困らない』という語りを基に、良かれと思って話し方の工夫を促すことは、子どもを追い込んでしまう可能性があること、話し方の工夫を止めたことが改善につながったことをまとめた。

子どもが大人とのやりとりの中で受け止められていると感じられることが、吃音の改善に影響することが明らかとなったため、参考資料として、子どもが受け止められていると感じる話し方のポイントを具体的な例とともに掲載した(図6)。

改善した方の声～話し方の工夫と吃音との関係～

以前は、人と話すとき、吃音症状が出ないように話し方の工夫をしていました。話し方の工夫を全て試してダメだったら、本当に辛かった。いつ症状が出るか、コミュニケーション場面はいつも緊張と不安がいっぱいだった。

話し方の工夫は10回くらい試して、1回2回くらいよく喋れたけど、その後は全然効かない。使えば使うほど悪化するから、自分に対して失望した。

話し方の工夫をしていた時は、自分のなかにロボットと操作している人がいた。事前に「深呼吸してから話そう」「口を大きく開けて話そう」等と準備してからスイッチを感じた。常に自分の頭で自分をコントロールしていた。今は一体感があって、会話を楽しんでいます。

例えば、冷蔵庫と言えないから、「この」とか「あの」とかつけて工夫します。今度「あの」とかまで意識して言えなくなってきちゃって、どんどん自分で選択肢をつぶすようなもの。たぶん意識が冷蔵庫から「この」に向かうから冷蔵庫のことをどうでもよくなっているから流暢に言える。次は「この」を意識するために、使えない武器になる。工夫すればするほど苦しくなっていく。ずっと使える話し方の工夫があれば、誰も困らない。

改善のポイント どんなに努力しても万能な話し方を習得することは難しかったようです。良かれと思って子どもに話し方の工夫を提案すると本人を追い込んでしまう可能性があります。話し方の工夫を止めたことが改善につながったようです。

4

図5 吃音者の声のページ

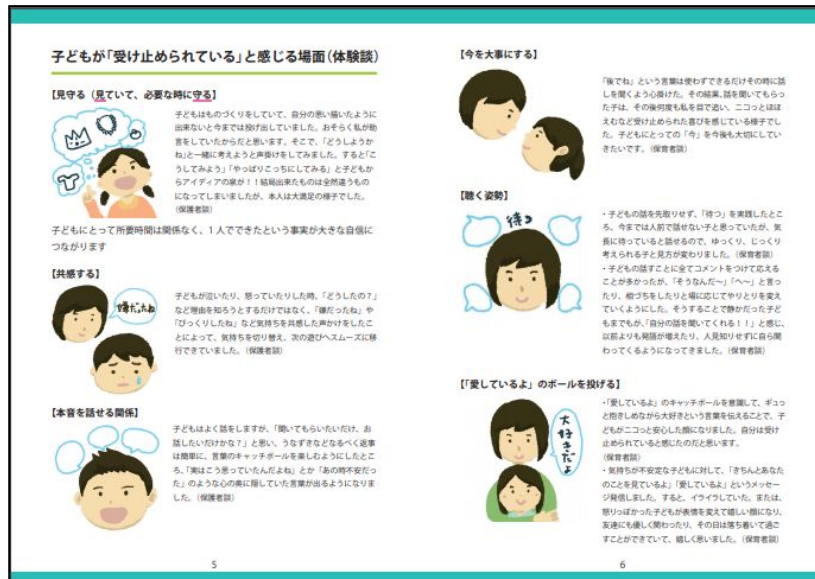


図6 リーフレット 子どもが受け止められていると感じる場面 (体験談)

まとめには(図7)自分のペースで感情や意思を表出する体験は、「安全基地」の栄養剤(ガソリン)になること、吃音症状が気になり、話し方の工夫を提案したくなるが、それは悪化要因となってしまう可能性があることを再度まとめた。

「発話」「行動」の基盤にある感情(ビルの1階)や意思(ビルの2階)を表出しやすい環境を整え、主体的な生活を通して自らの存在意義を肯定できる場面を増やすことを実践すると、わがままな子になってしまうことを心配する大人が多い。将来のこと、先のことを考え、ことば掛けをすることも重要であるが、そのことによって「安全基地」が不安定になってしまったら、主体的な生活を送ることができず、自信がつく体験が減ってしまうこと、「安全基地」が安定してきたら、「しなさい」「××したらダメでしょう」などのことば掛けが不安材料として作用しなくなる等、保護者が子どもとのコミュニケーションを変える際に、戸惑う内容について、解説した。

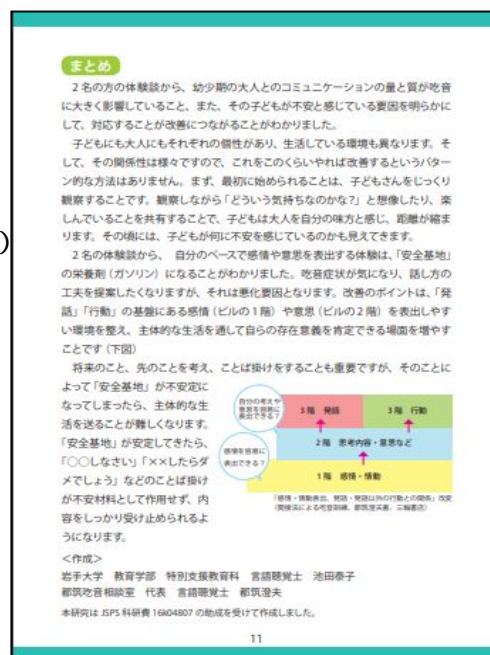


図7 リーフレット まとめ

(2) 第二研究

成人を対象とした吃音の訓練が、改善の方向に向かっているのか客観的に、定期的に確認することを目的とした包括的な検査は見当たらない状況である。調査結果より吃音の改善や悪化に関係があると考えられる要因を項目として挙げ、「吃音の改善状況把握シート」の作成を試みた。本資料の特徴は、吃音症状の有無だけではなく、悪化要因、改善要因自体を項目にしているため、その項目の回答状況を確認することで訓練においてどのようなところに重きを置いたらよいかを把握できることである。今回は、吃音者と非吃音者を対象に予備調査を実施し、項目検討を行った。

項目は、「吃音を他の人に知られたくないと思う」「話し方を工夫して吃音症状が表に出ない方が良いと思う」「どもるかもしれないが話してみようと思う」「他の人と話す場に参加することを嫌だと思う」「生活の中で吃音のことを考えている時間が多い」「自分が流暢にスラスラと話せたかどうかチェックしている」など、吃音が改善した成人の語りの中で、改善前と改善後で変化していた内容を項目として取り上げ、成人の吃音臨床経験のある言語聴覚士2名で項目を検討し、予備調査は38項目で行うことになった。対象は、成人吃音者53名、非吃音者118名、作成した38項目について、「とても当てはまる」「やや当てはまる」「どちらともいえない」「やや当てはまる」「全く当てはまらない」の5件法で回答を求めた。結果、吃音者のみ当てはまる項目と非吃音者にも当てはまる項目があり、項目検討を行った。今後は臨床場面で活用することを目的として、対象を増やし、項目検討を行う予定である。

[学会発表](計 11 件)

- 1 Yasuko Ikeda, Sumio Tsuzuki. “ Verification of Factors Related to the Deterioration/improvement of Stuttering Based on Narratives of Adult Stuttering Patients Who Exhibited Improvement Through a Training-based Developmental Framework for Addressing Phase IV Stuttering” (採択): The 31st World Congress of the IALP (International Association of Logopedics and Phoniatrics,2019年8月(台湾))
- 2 Yasuko Ikeda, Sumio Tsuzuki. Case report of an adult female whose stuttering improved after receiving a training based on the retrospective approach to spontaneous speech (RASS). 吃音・クラタリング世界合同会議 in Japan 2018,2018.7(広島)
- 3 Sumio Tsuzuki,Yasuko Ikeda.Report on the clinical course of an adult stuttrer whose stuttering is improving upon receiving treatment using a mental rehearsal method based on a chronological table 1. 10th Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing(APCSLH)2017,2017.9(成田)
- 4 Yasuko Ikeda,Sumio Tsuzuki. Report on the clinical course of an adult stuttrer whose stuttering is showing improvement upon receiving treatment using a mental rehearsal method based on a chronological table 2. 10th Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing(APCSLH)2017,2017.9(成田)
- 5 池田泰子,都筑澄夫.成人吃音者の吃音症状を包括的かつ詳細に把握する評価方法の検討～RASS理論「吃音質問紙」を用いて～:第18回日本言語聴覚学会,2017.6(島根)
- 6 池田泰子,都筑澄夫.成人吃音者に対する幼児期の吃音悪化要因への対応と日常生活場面における恐れと発話症状との関係を検証～RASS理論を用いて～.第61回日本音声言語医学会総会・学術講演会,2016.11(横浜)
- 7 池田泰子,都筑澄夫,足立さつき.学童児の吃音訓練における年表方式のメンタルリハーサル法と環境調整法との関係を検証.日本吃音・流暢性障害学会第4回大会,2016.9(所沢)
- 8 Yasuko Ikeda, Sumio Tsuzuki, Satsuki Adachi. Case report 1 on the 「Mental Rehearsal Program」 training method in adults who stutter: A comparison of stuttering symptoms in interview and daily situations The term “ life ” is implied. I have adopted this terminology for both reports.30th World Congress of the IALP(International Association of Logopedics and Phoniatrics),2016.8(ダブリン)
- 9 Sumio Tsuzuki, Yasuko Ikeda,Satsuki Adachi. Case report 2 on the the 「Mental Rehearsal Program」 training method in adults who stutter: Situational fear and speech symptoms.:30th World Congress of the IALP(International Association of Logopedics and Phoniatrics, 2016.8(ダブリン))
- 10 池田泰子,都筑澄夫,足立さつき.間接法「RASS」による訓練で吃音が改善しつつある小学生5年生の症例報告.第5回日本小児診療多職種研究会,2016.7(横浜)
- 11 池田泰子,都筑澄夫,足立さつき.成人吃音者の語りから自然で無意識な発話と吃音症状との関係を検証.第17回日本言語聴覚学会,2016.6(京都)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:芳川 玲子
ローマ字氏名:Yoshikawa Reiko
所属研究機関名:東海大学
部局名:文学部 心理社会学科
職名:教授
研究者番号(8桁):80312867

研究分担者氏名:宇佐美 慧
ローマ字氏名:Usami Satoshi
所属研究機関名:東京大学
部局名:高大接続研究開発センター追跡調査部門
職名:准教授
研究者番号(8桁):20735394

(2)研究協力者

研究協力者氏名:都筑 澄夫
ローマ字氏名:Stuzuki Sumio